中学校の修学旅行 ―――最新リポート

社会や自然と向き合う中で

横須賀市立久里浜中学校

岩手　2泊3日
15年5月　実施

久慈で自然を教材に学習 自治的な活動能力付ける

民泊先では釣った魚を囲炉裏で焼いて夕食に

神奈川県横須賀市の久里浜中学校（関島忍校長）は、「正しく、明るく、逞しく」を教育目標とする、創立67年の公立中学校。生徒数の多さが特徴の一つで、全学年で25クラス（特別支援学級を含む）あり、計844人が在籍する。

横須賀市は保護者や生徒が入学する学校を選択できる学校選択制を採用している。久里浜中学は唯一、毎年志願者が定員をオーバーする人気校。学区外から通学する生徒は200人近くいる。

交通の便の良さなどが人気の要因に挙がるが、3年学年主任の伊藤之展教諭は「生徒数が多い分、部活動の種類が多彩で活発なところが魅力ではないか」と分析する。男女の体操部があるのは横須賀市内でも同校を含め2校だけ。陸上、柔道、バレー、剣道などは近年関東大会、全国大会に出場している。

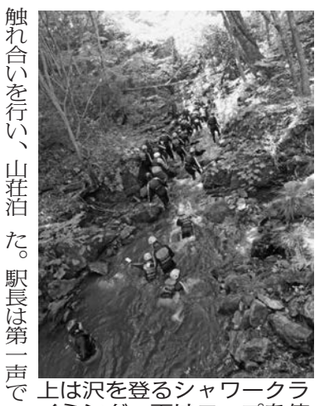
伊藤之展教諭

嘉山巧教諭

修学旅行は、毎年3年生の5月に実施しており、2015年は5月27日～29日に2泊3日で岩手県久慈市山形町を訪れた。目的は久慈市の大自然を教材としながら自然と人間の関わりを学ぶと共に、自治的な活動能力を身につけ、信頼と責任について考えさせる狙いがある。

旅行先として久慈市を東日本大震災の影響で京都・奈良に変更した2011年を除き2005年から10年選び続けている。2012年からは防災学習を修学旅行のテーマに盛り込んだ。12、13年は久慈市の隣の野田村で津波により決壊した防波堤を見学。語り部による説明を受けた。14年からは防波堤の復興が進んだこともあり、三陸鉄道駅長の講演を聞くことで防災学習を行っている。

修学旅行のコースの特徴は民泊で地元の人との触れ合いを行い、山荘泊で集団のあり方を学ぶ点にある。


上は沢を登るシャワークライミング、下はロープを使って木に登るツリーイング

1日目は東北新幹線で久慈市へ移動後、防災学習、民泊を2日目の9時まで継続。2日目は午前と午後に体験プログラムを行い全員で山荘に宿泊。3日目の午前に体験プログラムを実施したのち新幹線で帰路についた。

コース中の主な実施内容を紹介する。

命の尊さや防災の心構えを考えることを狙いにした防災学習では、三陸鉄道北リアス線久慈駅の駅長による講演を行った。駅長は第一声で「勇気をもって聞いてください」と語りかけた。凄惨な状況から復興にいたるまでを映像なども使いながら1時間以上かけて語った。生徒たちの表情は真剣で、防災に対する意識を高めた様子だった。特に自分たちと同じ15歳の少女が、津波が迫る中、瓦礫の下敷きになった家族を助ける話に衝撃を受けたという感想が多く聞かれた。

久慈駅長による講演

地元の人と触れ合いながら蕎麦打ち

土地の95％が山林という山深い山形町で行われた民泊では、42軒に約6人ずつ宿泊した。受け入れ家庭は専業でない農家が一番多く、林業、畜産、建設業、商店経営などもあった。

久慈市での民泊はずっと山形町で行っており、民泊家庭の中には久里浜中学の生徒たちを7～8回受け入れている家庭もある。嘉山巧教諭は「10年続いていることで強いつながりができ、安心してお願いができる。とても温かく迎え入れてくれるので、不安があった生徒もすぐに溶け込む。『今からここはあなたたちの家だよ』と言ってくれた家庭もあった」と山形町を選び続ける理由を語る。

民泊先では畑で収穫した野菜を使った共同調理、家畜の世話、魚釣りなどを経験した。

体験プログラムは自然体験、文化体験、フォレストボード作りの三つを順番に行った。都会育ちの生徒たちは、旅の目的である自然体験を満喫。シャワークライミング（沢登り）、洞窟探検、カヌー・カヤック、ツリーイング（木登り）などが人気だった。

事後学習では1人ずつ新聞に感想をまとめた。民泊先で触れた人のやさしさ、大自然の美しさや怖さ、公共の場での集団移動のあり方などについてさまざまな感想が見られた。

特に感想が多かった民泊について伊藤教諭は「観光旅行は大人になってからでもできるが、民泊を体験できるのは学生時代だけだろう。横須賀とまったく雰囲気が違う久慈の土地柄や人柄に触れたことは生徒にとってとても貴重な経験になった」と学習効果を語る。

嘉山教諭は「民泊ではおじいちゃん、おばあちゃんとの触れ合いを楽しんでいた。山形町の山間部では高齢化による受け入れ先の減少が課題になっているが、今後も民泊体験を取り入れた修学旅行を続けたい」と考えている。

常翔啓光学園中・高等学校

高知県・四万十　3泊4日
15年6月　実施

初めての環境、民泊で人と関わる力を育む

雨の中の田植え体験

常翔啓光学園中学校・高等学校（大阪府枚方市、里村裕校長）は、高校ラグビーの強豪として名高い6年一貫教育校。「自・優・探・心」をスローガンに掲げ、中高6年間を通し、自ら学ぶことによる学力の向上を図ると同時に、人間力養成のための心の教育を実践。近年は難関大学への合格実績を伸ばしていることでも知られる進学校だ。

中学校のカリキュラムの中で特徴的なのが「コミュニケーション」の授業だ。全学年で毎週1コマあるこの時間は、他者と関わる力が乏しいとされる今の子供たちに、プレゼンテーション能力などの総合的なコミュニケーション能力を養うのが目的。そのために各学年で段階的に、自ら動いて調べ、書き、発表する場を設けている。3年生ではその集大成として、自分の設定したテーマに基づき1年かけて卒業研究をまとめ、発表する。

同校の修学旅行は、一昨年までの3年間がオーストラリアだったほかは、10年以上、高知県の四万十で、民泊を盛り込む形で行ってきた。日程や旅行費用を理由に旅行先を国内に戻す際には四万十以外の方面も検討したというが、引率経験のある教員らの「民泊の充実や豊富な自然体験メニューなど、生徒を行かせて良かったと思えるのが四万十」という実感が、四万十修学旅行の復活を後押しした。

安山竜一教諭

今年の修学旅行の日程は、1日目に桂浜を見学後、四万十に移動して夕方から民泊家庭に合流。2日目は丸1日、民泊先で過ごし、3日目の朝に離村。その後、四万十川でのいかだ遊びなどの自然体験を行い、四万十市内のホテルに宿泊。4日目はホエールウォッチングやカツオのたたきづくりなどを行った後、大阪に戻るというものだ。

同校が民泊にこだわるのには理由がある。「欲しいものが欲しいときに手に入り、してほしいことをなんでもすぐにやってくれる人がいる。最近の子供はみんな他力本願で」と生徒を評するのは、3年生を受け持つ安山竜一教諭。だからこそ、親や先生など、普段頼っている身近な大人から離れて、1人の大人になりきって生活することで他力本願を排除し、自分から人と関わる力、すなわちコミュニケーション力を高めてほしいと考えているのだ。さらに、四万十の受け入れ家庭の人たちの人情豊かで温かなまなざしに触れ、人のやさしさや自分たちを支えてくれている周りの多くの人の存在を実感してほしいとの思いもある。

育苗箱の清掃作業

味噌づくりを行った家も

慣れない手つきで料理に挑戦

薪で風呂釜の湯を沸かす

2～5人の友人グループに分かれての民泊だが、「行くのがいや」と言う生徒もいるほど、見知らぬ人の家に2泊することとへの生徒たちの不安感は強かったという。実際、民泊の受け入れ家庭との顔合わせでは緊張の面持ちで、安山教諭曰く「借り来てきた猫状態」だった生徒たち。だが2日目にはすっかり打ち解けて、表情も柔らかくなっていた。「逆にわれわれが各家庭を見回りに行くと『何で来たんだよ』と言わんばかりに、表情を固くした子もいた」と安山教諭は笑って振り返る。

2日目はあいにくの雨だったものの、2泊の民泊生活の間に生徒たちは、受け入れ家庭で田植えやまき割り、野菜の収穫、アユ釣りなどを行った。梅酒の仕込みや郷土料理作りなど、普段はやらないような台所仕事を体験した生徒もいた。また夜には、多くの家庭でホタル見学に連れて行ってくれ、生徒たちは初夏の四万十の豊かな自然を体感したという。

わずかな友人たちとは一緒であるものの、先生からも親からも離れ、初めての土地、初めての土地、初めて触れ合う人の家での2泊。受け入れ家庭での心のこもったもてなしを通して感じた人の温もりに、3日目朝の離村の後には、移動のバス車内で、「寂しい」と口に出す生徒、人知れず涙をにじませている生徒もいた。

同校では旅行後に感想文をまとめるなどの事後指導をあえて行っていない。「修学旅行を活字にして残しても、実際に生徒が感じ取ったものとはかけ離れてしまう。現地で感じた人の温かさなどを、感じたままに大切にしてほしい」（安山教諭）との考えからだ。修学旅行後に各家庭から聞かれる、「家の手伝いを率先してやるようになった」「親の話をよく聞くようになった」などの声をもってその教育効果と考えている。

さらに、教員が強制するのではなく、各家庭から主体的にお礼の手紙や電話といった受け入れ先へのコンタクトを取ってもらうことで、保護者も含めたコミュニケーション力の向上という教育効果も狙っている。安山教諭は「充実した体験ができたことへの生徒自身の感謝の気持ちがあれば、お礼の電話をしたりするのは当然の礼儀。生徒がそこまでできてこそ、本校の修学旅行の求める姿」と語った。

今回の修学旅行について安山教諭は、「旅行会社の的確なサポートもあり、大きなトラブルもなく、日常の教育指導の延長として満足のいく修学旅行を実施できた」と総括。その上で、生徒が民泊で感じたものをより鮮烈なまま持ち帰れるよう、民泊を2～4日目にすべきと改善点を示した。

「人と防災未来センター」で、今、実感できる防災教育を。

防災は、過去の経験と教訓を「学ぶ」ことからはじまります。人と防災未来センターは、阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に伝え、防災の知識と、今後起こりうる災害への備えを学ぶ「防災学習施設」です。

小中学生以下 無料

団体予約
ご来館日の
6ヶ月前の1日から
FAX先着順で受付

展示内容のご案内

震災を体感
1.17シアター
阪神・淡路大震災の地震破壊のすさまじさを大型の映像と音響で体感します。
震災直後のまち
震災直後のまち並みをジオラマ模型でリアルに再現しています。
大震災ホール
復興に至るまでのまちと人を、直面する課題とともにドラマで紹介します。

震災を辿る
復興への道
地震直後や復興過程の生活・まちの姿をメッセージとグラフィックで解説します。
記憶の壁
震災関連資料を提供者の体験談と共に展示しています。
語り部コーナー
ビデオで震災体験を紹介したり、語り部が自らの体験を語ります。

防災・減災を体験
防災・減災ワークショップ
実験やゲームを通して、防災・減災に関する実践的な知識を学習します。

東日本大震災を知る
こころのシアター
東日本大震災被災地のドキュメンタリー映像等を3Dで上映しています。

資料請求受付中
「送付先住所・団体名・ご担当者名・電話番号」+「資料請求」とご記載のうえ、FAXにてご請求ください。FAX 078-262-5055

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
TEL. 078-262-5050（観覧案内）
〒651-0073　兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
http://www.dri.ne.jp

映画村の体験学習
本物と自然と昔にこだわる

殺陣講座　東映京都撮影所の殺陣師や俳優が立ち回りの形をお教えします。もちろん安全性は十分配慮しています。木刀を使用した殺陣の体験を通して時代劇の魅力に触れてください。

お手軽な時代劇の扮装体験　時代劇の扮装をして映画村の江戸の町を歩いてみませんか。メイクなし、かつらも省いた着物の着付けだけのお手軽プランなら、短時間で「変身」して時代劇の世界をお楽しみいただけます。
【扮装種類】町娘・振袖若衆・武家内儀・千姫・若侍・遠山奉行・町人・浪人・坂本龍馬・新選組隊士・忍者

清水焼絵付け体験　【染付】素焼の生地に絵付けをしていただきます。染付の色はグレーと茶色の2種類あります。【京焼】白色系に焼き上げた器やグラスに3～5色のカラーを使って絵付けをしていただきます。

京扇子・京うちわ手描き体験　舞踊や茶道にも欠かせない扇子やうちわは京都の伝統産業のひとつです。専門家の指導のもとにオリジナルの絵柄を描いて楽しんでください。

※体験学習は全て有料・要予約となります。

体験学習のパンフレット・DVDのご請求、お問い合わせ、お申し込みはこちらまで!
TOEI KYOTO STUDIO PARK
東映太秦映画村
http://www.toei-eigamura.com
〒616-8586　京都市右京区太秦東蜂岡町10番地
ナビダイヤル ✆0570-064349　お問い合わせ ✆075-864-7716
営業時間 /9:00～17:00（3～7、9月の平日と10、11月毎日）
9:00～18:00（3～7、9月の土・日・祝と8月毎日）
9:30～16:30（12～2月の平日）
9:30～17:00（12～2月の土・日・祝）
休村日 /2016年1月18日～22日